

## デジタルプロセスについて

ICTカレッジで考えるデジタルビジネス時代の人材に必要な要素の1つ「デジタルプロセス」は、アジャイル開発などを用い、動くサービスを素早く作り、継続的改善のプロセスが実践できることです。

デジタルプロセスの代表的なものとしては、アジャイル開発があり、企画・開発・運用まで含めたビジネス駆動型の手法として注目されています。また、デジタルプロセスを実現するためのビルドやテストの自動化も重要な要素となります。

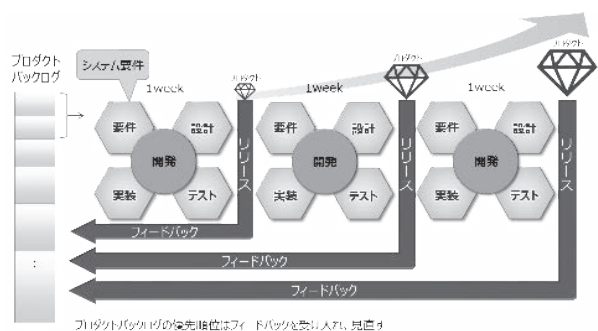
「デジタル思考」、つまりユーザー視点でビジネスやサービスをデザインできたとしても、それが本当に価値あるものかは提供してみなければわからないという状況です。そのため、小さく作って、ユーザーからフィードバックをもらう「デジタルプロセス」があってこそ、デジタルビジネスが動き出します。デジタル思考とデジタルプロセスの両輪で推進することが重要なのです。

## アジャイル開発

## アジャイル開発の特徴

アジャイル開発では、お客様が必要と思う、今利用したいものから提供していきます。

短い間隔で、継続的に、動くソフトウェアをリリースし、提供したものをユーザーに使っていただき、フィードバックを得ることで満足度の高いシステムを作成していきます。アジャイル開発のメリットとしては、短い間隔で小さなものを素早く作り、利用者の反応を見ながら大きく育てることが出来ます。



## アジャイル開発には、実践的な学びが必要

開発手法としてアジャイルを採用する企業は、年々増加しています。半面、「アジャイル開発が上手くいかない」というケースも増えてきました。理由の1つには、アジャイルに関する実践的な学びが不足していることがあります。

実践的な学びの例を挙げると、ソースコードへの対処です。アジャイル開発では、機能追加に必要なスピードを上げたり、不具合が混入する割合を下げるために、コードの複雑さを常に小さく保つ必要があります。そこで必要となる実践的な学びは「エクストリームプログラミング(XP)」のプラクティスの1つである「テスト駆動開発」です。「リファクタリング」により、ソースコードの整理を行い、適宜部品化なども実施しプログラムの再利用性を高めていく必要があります。

また、スクラムをベースとしたアジャイル開発は、書籍や座学だけでは理解しづらく、適切な振る舞いが身に付かないことがあります。そのため、疑似的にプロジェクトを体験し、有識者から指導を受け、実践的なスキル・ノウハウを習得することが有益です。これにより、アジャイル開発を自社に定着させ、デジタルビジネスを推進できるようになります。

## アジャイル開発の実践力を高めるコース

アジャイル開発の実践力を高めるコースをご紹介します。

UBU34L

## テスト駆動開発の基礎

テキストに沿ってハンズオン形式でテスト駆動開発を体験します。演習では、ペアプログラミングと組み合わせて、プログラミングの課題に挑戦します。

UBU14L

## アジャイル開発の要求整理術

## ～プロダクトバックログの作成からメンテナンスまで～

要求整理/環境構築フェーズにおける要求の洗い出しとプロダクトバックログやリリース計画の作成について説明します。また、開発開始後に発生するプロダクトバックログとリリース計画の見直しの方法について説明します。

UBS99L

## アジャイル開発手法によるシステム開発

スクラムをベースとしたアジャイル開発の進め方（スプリント計画ミーティング、開発作業、スプリントレビューミーティング、スプリント振り返りなど）について演習を通して学習します。演習では、アジャイル開発手法（スクラム）の作業内容に基づき、システム開発プロジェクトを疑似体験します。